令和5年3月1日発行（毎年1.3.6.9月の1日発行）　第164号

一仏両祖の教えを今に伝える

曹洞禅グラフ

SŌTŌZEN GRAPHICS

2023彼岸春号
No.164

特集

ダイバーシティは多様性しなやかな強さ

洞松寺に人が集まる理由

［取材］柳澤円

「そこにいる」ことの意義

島薗 進

お正月やお盆には親族が集まってにぎやかに半日を過ごす。それがふつうだと思っていました。親戚づきあいはたいへんで、気をつかうことが多くストレスの種だという思いもありました。しかし、私が中学生の頃から六〇年が経過し、その間にだんだんと親戚の数が減っていきました。私のおじおばはあわせて二一人いたのですが、先日、最後のおじが亡くなりました。

親戚づきあいが減ったのは、自分が歳をとったのでそうなったという面もありますが、社会の少子化が影響しています。私の子どもは二人いますが、そのおじおばは四人ですが、これでも多い方かもしれません。親族の規模が小さくなり、一族が集まる機会が減ってきています。祖父の三十三回忌はにぎやかに行いましたが、父母の法事はわずかな人数になりました。

血縁とともに地縁も薄くなってきました。何度か引っ越しましたが、その都度、ご近所との付き合いは浅くなっています。ご近所との付き合いが好きだった母のことが懐かしいです。

かわって私たちは、どのような縁を育ててきているのでしょうか。仕事の縁が大きくなっていますが、高齢者を含め、この種の縁の薄い人も多いです。血縁、地縁、仕事の縁のほかに、新たな縁をつくっていく時期に入ったのかもしれません。まだ、動く力はあるので、何かをしようとすると、それは縁をつくり育てていくことだと気づきます。

私は高齢者だからとくにそう感じるのかもしれませんが、ぼやぼやしているうちに孤立していく恐れがあります。これは高齢者だけではないようです。自ずから縁に恵まれると感ずる人が多かった時代から、縁を育てていかなくてはならない時代になったと言えましょう。宗教のあり方も変化を避けられません。

しまぞの すすむ
1948年生まれ。宗教学者。東京大学大学院名誉教授。上智大学神学部特任教授。同グリーフケア研究所所長。専門は日本宗教史。

縁を育てるというと自分の力でつくっていくというように感じます。しかし、やはり縁は恵まれるものでしょう。自分で思ったように縁をつくることはなかなかできません。でも、縁に恵まれるように願う心の構えをもって、働きかけるということはできるでしょう。

現代社会に即して言い換えると、これはケアしケアされる関係を育てていくということになるかと思います。上下の関係ではなく、ヨコの相互関係が求められます。そのような場をもったり、集いをつくったりする。そして、心を開いて、いわば無心に「そこにいる」ことを大切にするということでしょう。

東日本大震災では「寄り添い」の姿勢の意義が語られました。大切な方を亡くして悲しい思いをしている方々、帰る場所を喪って途方にくれている方々に何かできるでしょうか。これまであまり縁がなかった方の「ケアをする」ためには、まず「近くに行ってそこにいる」ことが大切です。それは縁に恵まれることを願ってのことでしょう。そこに尊い何かが現れるという思い（想念）も伴います。ケアの新しい形と言えましょう。

挿画｜本間希代子　絵描き。岐阜の山村で田舎暮らしをしながら、古楽器奏者の夫 渡辺敏晴と「アトリエ玉手箱」を主宰。

ダイバーシティ（多様性）はしなやかな強さ

洞松寺に人が集まる理由

岡山県矢掛町。
「倉敷の奥座敷」と呼ばれる
人口約一万四千人の町に、
世界各国から人が集うお寺がある。
専門僧堂である洞松寺は、
日本以外の国を背景にもつ修行僧に向けた
国際的な研修施設「宗立専門僧堂」を併設し、
開単以来、約十五年間で
延べ三〇〇名ほどの僧侶が
約四十ヶ国から安居してきた。
一般的に壁として立ちはだかるとされる
言語や習慣の違いに、
修行僧たちはどのように対処するのだろう。
二〇二二年冬、
フランス人僧侶による法戦式があると聞き、
洞松寺を目指した。

自然豊かな異世界に到着

新倉敷駅から車で約二〇分。徐々に店舗や人家が減り、緩やかに上昇する車道が豊かな田畑の中を走り抜け、背景に大きな山を備えた立派な山門が見えてくる。眼下に広がる田んぼに稲穂が揃う時期は、どれほど美しいところだろう。俗世間と離れた修行期間はやはり、街の喧騒から物理的に離れたこうした場所が望ましいのだろうと思いつつ、あまりにも澄んだ空気と静かな環境に、思わず手元の携帯の電波が入るかどうかを確認した。その時によって多少異なるものの、安居の人数は二十数名。北米、南米、欧州、そして日本からの雲水たちが寝食を共にする。敷地内の掃除や整理整頓、協力し合いながら務める日々の典座、大浴場を温めるための薪割り、数ヶ所に分かれた畑の管理と食材の確保など、作務は枚挙に暇がない。駅に迎えに来てくれたオーストラリア人の尼僧・慧照さんいわく、尼僧も男僧も一緒に、それも英語で修行ができる僧堂自体がほとんどないのだそうだ。そのため多くの人が地球の反対側からでも洞松寺を目指してやって来る。彼女自身は過去に十二年という長い年月を洞松寺で過ごし、現在は自身が住職になる場所を探しながら、安居期間中の三ヶ月間に、洞松寺の手伝いをしている。この日もニューヨークから久しぶりに戻ってきたところだった。運転してくれたドイツ人僧侶の明玄さんが車を停めると、立派な山門が優しく佇んでいた。きれいに掃き清められた庭と、歴史を感じさせる本堂に迎えられた時にはすでに、この場に来られた幸運に感謝していた。美しい観音像に気を取られていると、足元から猫たちの挨拶が聞こえ、勝手ながら歓迎を受けたように感じられた。

山門（右頁）をくぐると広がる庭。朝の作務できれいに整えられている。

三度の食事は全員で。応量器を使っていただく朝粥。

多くの人はそれぞれの国で仏門の学びをしており、
坐禅や読経を実践してきています。

海外から望む声
「英語の僧堂を日本に」

ご住職の鈴木聖道老師に、これから執り行われる法戦式の意味などを教えていただいた。

「僧侶たちは安居といって、僧堂に集まり一定期間の修行を行います。今はちょうど冬安居ですね。安居中、リーダーとしてみんなを指導する首座という役職があります。法戦式は、首座としての力量を発揮する禅問答の儀式のことです。毎回私がテーマを決めていて、今回は道元禅師の「永平広録」から「心身脱落」をテーマにしています。これはここの法戦式ではよく取り上げる題でもあります。」

――今回の首座はフランス人の方だとうかがいました。

「そうです、行道さんといって、フランスから六ヶ月間、ここで修行している方です。首座には普段の行いを見ながら、道心のある人を選んでいます。」

――ここは国際色が豊かですが、国際的であることの意味はどのように捉えていらっしゃいますか。

「曹洞宗が海外で布教活動を行ってきた中で、海外の方が日本での修行を望んでいることが大きいです。私自身も一九八四年からロサンゼルスに一年、ニューヨークの禅堂で三年間を過ごし、そうした声を直接聞くことが多くありました。できれば各国に専門僧堂があること、そして日本にも同様の受け入れができる僧堂が必要であると、その頃から感じていました。洞松寺の前に住職をしていたお寺にも、よく外国から訪れる方々がいたので、十六年前に洞松寺の住職になってからはここで引き継いで受け入れていました。参禅者も以前から外国の方が多かったですね。そうしたニーズから少しずつ始まり、平成二十一年に専門僧堂となり、そして平成二十六年には宗立専門僧堂も併設して、正式に海外からも安居者を向かえるようになりました。今回の法戦式は、宗立専門僧堂の法戦式となりますが、日々の修行はみんな一緒に取り組んでいます。」

――どうしても言葉や文化の壁を考えてしまうのですが、日々のコミュニケーションはどのように行われていますか。

「言葉は修行には必要ありません。多くの人はそれぞれの国で仏門の学びをしており、坐禅や読経を実践してきています。洞松寺における作法や意義などは、最初に旦過寮と呼ばれる準備期間に説明されています。あとはお互いに気遣いながら日々の修行に黙って取り組んでいます。」

言語は壁にあらず。違いを超える禅の教え

確かに洞松寺の僧侶たちを見ていると、言語の違いはそれほど大きな問題ではないようだった。英語を使うことは多いものの、母国語ではない英語をそれほど得意としない人もいるし、ゼスチャーや単語で十分にコミュニケーションができている場面をたくさん目撃した。また聖道老師が英語でやりとりしている様子や、儀式中のお話はアメリカご出身の後堂（ごどう）老師・武田道育老師が逐次訳されている場面もあった。つまり彼らの間には常に禅の教えが存在するため、言語を超えた次元で交流しているようだ。寝食を共にし、同じ道を志す者同士に許された強さを感じた。食文化の違いにいたっては楽しそうでもあった。筆者がお邪魔した日の夕食は、スイス出身で元調理人という光元（こうげん）さんが典座を務め、ピザを焼いていた。トマトソースを伸ばし生の水菜が乗った精進ピザに、静かな舌鼓がこだましていたように思う。おそらく細かくみれば日常には小さな課題もあるのかもしれないが、それは決して国や言語の違いに起因するものではなく、人間同士の共同生活によることがほとんどだろう。実際、数名に質問してみたが、あまり言語の壁を感じている様子はなかった。むしろ英語で仏教について語り合える機会や、異国出身者との友情に感謝している声が多い。ブラジル出身で日系三世の悦道（えつどう）さんは「言語は重要な要素だけど、ここでは大きな問題になりません。それよりも日々の坐禅や修行を通してお互いの存在を深く知ることができます。また、これまでの人生では出会う機会がなかった背景の人とも知り合えて、素晴らしい経験をさせてもらっています」と教えてくれた。彼は元々、在家の参禅者として定期的に洞松寺を訪れ、今年に入ってから得度したと言う。彼に限らず、洞松寺で出会った多くの僧侶たちが自らの意思で仏門に入ることを選んでいた。お寺の後継ではなく、むしろ実家はキリスト教の背景が濃い人も多い。学校教育を終えた後、あるいは社会人生活に区切りをつけて、仏門の学びに入った彼らと話をしていると、生き方を伝える教えだという仏教の意味を実感した。

ダイバーシティ法戦式の見学

言語が大きな問題でないと分かった一方で、法戦式がどのように行われるのかは疑問のままだった。首座であるフランス人の行道さんは日

使いやすく整頓された台所。食事の支度や片付けも協力しながら行われる。

言語は重要な要素だけど、
ここでは大きな問題になりません。

本語も英語もあまり話さず、しかし法戦式の問答は言葉を用いたやりとりだからだ。終始、間近で法戦式を見学させてもらった。一同揃いの袈裟はもちろん、大きな動きや鳴り響く大太鼓の波動など、一連の法儀は迫力があった。問答を聞いていると、聖道老師が日本語で、そして後堂老師は英語で語り、首座に向けられた僧侶たちからの問いは英語か日本語で、首座の答えはフランス語か英語。問者による「珍重」と首座の「万歳」はそのまま。つまり法戦式も彼らの普段の会話のままであった。仏門にいる彼らだからこそ叶う多様な問答に、「修行に言語は必要ない」という聖道老師の言葉の意図を実感した。

法戦式の後、行道さんに思いを聞いた。「法戦式を終えてホッとしています。首座と言われた時はとても誇らしさを感じ、聖道老師やフランスにいる師匠に一層強く感謝しました。法戦式の前は緊張やストレスもありましたが、今はとても幸せな気持ちです」優しい表情で語る行道さんの言葉を通して、修行で得るものとは言語ではなく、心と実践で得るものだということを知った。

短い滞在だったが、洞松寺では非常に大切な価値観に触れることができた。地に足をつけ、坐禅をし、他者を敬い、自己を見つめ、場を整えること。出身地や年齢や性別などの背景を飛び越えた、個が生命を全うするための学びの時間のようだった。日本人僧侶の聖彦さんが「分かりにくいことを見せてくれるのが仏教」とおっしゃっていたが、まさに洞松寺の魅力は言語化できないことを体現していることにある。

（取材執筆　柳澤円）

法戦式の後、聖道老師（写真前列、右から3人目）、後堂老師（聖道老師の右隣）と首座の行道さん（同じく左隣）。
尼僧の慧照さん（前列左）や、安居中の悦道さん（後列右）明玄さん（悦道さん左隣）光元さん（明玄さん左隣）ほか宗立専門僧堂の皆さん。

柳澤 円（やなぎさわまどか）
ライター、編集、翻訳マネジメント。食と農と社会の課題をテーマに執筆する。株式会社Two Doors代表

読者プレゼント

今回の特集にご登場頂いた鈴木聖道師の書を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画（下記「お便り募集」送り先）まで、お名前・郵便番号・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。

2023年5月末必着

本誌162号（秋号）プレゼント、「東海七福神めぐり」色紙2枚セットは次の方々が当選されました。

茨城県／安島陽一様　群馬県／楯次夫様
静岡県／神戸久枝様　愛知県／渡邉憲子様
山口県／谷林蔦子様

お便り募集

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

送り先
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
仏教企画編集部
Eメールアドレス
fujiki@water.ocn.ne.jp

読者からのお便り

仙台市　髙橋久美子 様

統一教会の問題から宗教のあり方について読ませていただきました。この問題のおかげで全ての宗教も迷惑していることとお察しします。信仰することで子供が幸せになる、世の中がよくなるならわかりますが、真逆の統一教会は宗教ではないと思います。私達は、相手を変えるのではなく、自分自身が変わる事が大事だと思います。なかなか難しい事ですが、一人一人顔が違うように性格も個性も考え方も違います。それと共に思い方受け止め方も違います。自分の前に起きて来るさまざまな事を、前むきに受けとめて、創意工夫していく事を一人一人が努力する事によって、世界平和につながると思います。

最初の頁にありました〝放下著〟〝一行三昧〟とてもわかりやすく感動しました。〝人の一生は自己表現である〟、あたしも八十歳になりました。お祝いに二人の息子達にお金をいただき、亡夫との思い出深い、山形県の温泉に三日泊まってきました。ありがたいです。障害者の亡夫と一生懸命働いてきました。亡き夫と亡き姑のお徳のおかげで、幸せな日々をすごさせていただいております。求めず感謝して、少しでも人様のお役にたてるよう一日一日を楽しく大切にすごしていきたいと心しております。

毎日書道

書家　松山妍流

或遇悪羅刹
毒竜諸鬼等
念彼観音力
時悉不敢害

『法華経』「普門品偈」より

或いは悪羅刹、
毒竜、諸鬼等に
遇ってしまっても
彼の観音の力を念ずれば
時にどれもみな
全く害さないのである

作品募集

ご家族のみなさまのご応募をお待ちしております

お手本を参考にして、作品を半紙（横向、お名前は左側）に書いてご応募ください。（無料）
ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。
住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。
161号（夏号）～164号（今号）の審査発表は167号（冬号）にて行ないます。

送り先　〒252-0116　神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
仏教企画　☎042-703-8641

締　切　2023年5月末（末日消印有効）

松山妍流先生は、埼玉県所沢市吉祥院住職丸山劫外師のお姉さんで書家（佐藤柯流に師事）です。

『曹洞禅グラフ』

募集俳句選

選・尾崎竹詩

寒紅を濃く一生の決する今日

佐賀県　池内淳子

寒紅は寒中に製した紅。品質が良く薬効もあるとのこと。一生を決するとは大試験や大勝負をする日なのか。寒中に人生を決める一大事に立ち向かう決意がひしひしと伝わってくる。緊張の極みで真っ赤な紅を濃く引いた心意気が見えてきます。下五の「決する今日」は「決する日」と五音にした方がさらに緊張感が増してきます。

SLの吼えて走るや秋夕焼

埼玉県　西岡義男

秋の夕焼けの中をSLがけたたましい音を立てて走っている情景がありありと見えてきます。その感動的な景色を描くだけでは満足できないのでしょう。SLが「吼える」としたことでSLがまるで生き物の如く逞しく迫って来るようになりました。これも一種の擬人化と言えましょう。

蓮の実や穿り始め盆の上

山形県　阿部正志

蓮の実は熟すと自然に飛び出してくるが、中には飛び出せなくて漏斗状の花托の穴の中に残されたままのものもある。硬い穴の中の実を取り出すのは並大抵でない。千枚通しのような鋭い針で穿りだして貴重な実を食べるのです。

上五は「や」で切らない方が自然でしょう。

本家より野菜いたゞく秋彼岸

東京都　五十嵐博子

本家と分家のお付き合いがよく想像できます。本家は昔からの田畑を勤勉に守って暮らしているのでしょう。分家は会社勤めでしょうか。それに感謝している心情が「いたゞく」に現れ、祖先に対する思いが「秋彼岸」によく表れています。

選者詠

うす紙のごとき弥生の空一枚

尾崎竹詩

作品募集

みなさまのご応募をお待ちしております（お一人3作品まで）

お申し込み方法

作品、住所、氏名、電話番号を明記して下記のいずれかにてお寄せください。

1　はがき、封書で投稿
　送り先・〒252-0116
　相模原市緑区城山4-2-5
　仏教企画
　『曹洞禅グラフ』俳句募集係宛

2　Eメールで投稿
　fujiki@water.ocn.ne.jp

締切　令和4年5月31日消印有効

- ご応募の中から優秀な作品を選び、166号の誌上にて発表する予定です。
- 更に年に1回冬号（新年号）にて年間優秀作品を選出し、記念品を贈呈します。

おざき　たけし● 1947年　徳島県阿南市生まれ。2016年　現代俳句協会理事。2019年より神奈川県現代俳句協会会長

安らかな未来に向かう「八正道」的くらしかた

藤井隆英（ふじい・りゅうえい）
豊橋市一月院副住職。横浜市 徳雄山 建功寺勤務。北海道大学水産学部卒業。同大学院中退。整体師。zafu代表。身心堂 主宰。「zafuざふ」「安楽坐禅法」開発者。禅をベースにしたオリジナルの運動療法、動的瞑想法を伝える活動を展開。

3 「正思惟」～どう想うか～

仏法による安らかな未来に向かう八つの指針「八正道」。今回は二つ目「正思惟」を参究いたします。

まず、辞書で「思惟」を引きますと「考えめぐらすこと。想いはからうこと」。また「哲学で、感覚や知覚以外の認識作用。分析、総合、推理、判断などの精神作用をいう」とも書かれています。

では、一般的な意味としての思惟が仏法的に〝正しい〟思惟になるための重要な要素とは何でしょうか。それは仏法のビジョンとミッション、すなわち前回参究した「正見」の視点を念頭に置いた認識をし、精神に働きかけていくことです。

仏法にて、「正見」視点による本来の思惟は以下の三つです。

❖無貪欲（むとんよく）：欲望が起こる要因を探り、できるだけ起きないためにはどうしたらよいかについての思惟。

❖無瞋恚（むしんい）：怒りが起こる要因を探り、できるだけ起きないためにはどうしたらよいかについての思惟。

❖無害心（むがいしん）：悪縁が起こる要因を探り、できるだけ起きないためにはどうしたらよいかについての思惟。

そして各思惟に記されている欲望・怒り・悪縁という要素が起こった時、以下の三点を重視して想いはからうことが仏法的に〝正しく〟思惟するための重要指針です。

- 「起こったからだめ」ではなく、「必ず起こる」ということを深く認知すること。
- 「起こったとき」に、無視や排除をしないこと。
- 「起こったもの」を、過度の悲観、または他者や環境のせいにしないこと。

これら「仏法に忠実」である視点と指針による営みにより、はじめて思惟が「想いはからう精神作用」から、正思惟の徳目である「仏法的意思の深化と構築」へと変化していくのです。

正思惟による仏法的意思は、決して依存や分断的思考からは生まれません。日々沸き起こる思考や実践を丁寧に判断なく取り上げた上で、仏法に沿っているかを自ら問い続けることからでしか生まれないのです。

今回は、手の叩き方により、自分への深い想いを感じていく「拍手タップワーク」をお伝えいたします。

左手の平を上に向けおへその辺りに置き、右手指先を左手の平にそっと乗せます。次に右手を上下させ、指先によって左手の平を一秒程度の間隔で叩き続けます。叩く力は叩かれている部分が心地よく感じるよう調整します。右手指先は何指でも何本でも結構ですが、できるだけ左手の平を満遍なく叩くよう場所を変えていってください。頃合いをみて右手と左手の役割を変えて行います。

左右手の平の指腹を一秒程度の一定間隔で叩き続けます。右手は左手を。左手は右手をどう叩けば心地よい感覚となるかに想いをめぐらせながら試行し叩き続けます。手の方向や位置・間隔・強さ・叩き方・振動の伝わりなど、考えられうる広範な意識によって感覚を観察し心地よさを探り続けていきます。そこに果てがあるわけでなく、探ること自体を味わいます。

左右手の平によって一秒程度の一定間隔で拍手をし続けます。手の開き方・間隔・強さ・叩き方・振動の伝わり方・発せられた音なども駆使し、考えられうる広範な意識によって感覚を観察し心地よい拍手を探り続けます。大切なのは叩いた結果が心地よくなかったとしても思考から離れ、ただ受け止めることです。すると自分への包容的な深い想いが沸き起こります。

宗教虐待

被害者の声を聞く

前編

旧統一教会に母親が入信したエマさん（仮名、四〇代・女性）。約三十年に及ぶ体験を語っていただいた。

家族をこわす「信仰」のはじまり

家族関係に大きな変化が生じたのは、エマさんが中学生になり、母の宗教活動が本格化した頃だった。それまで家族に知られずに信仰をしていた母が、「豹変」したという。子育てがひと段落した時期、教団自体の活動が活発化していた時期でもあり、世紀末の不安な世相とも重なっていた。

ある朝、起きたら母がいなかった。わずかな現金と置手紙があった。

「修行で海外に行くのでしばらく帰りません」

働いている父も、遅くまで帰ってこない。エマさんは家事をせねばならず、弟の弁当も作ることになった。まだネグレクト、ヤング・ケアラーという言葉も知られていない時代だった。

母は教団から多額の献金ノルマを課され、激しく叱咤されていた。家中の金品を探し回り、エマさんと弟の学資保険を解約し、サラ金で父の名義を勝手に使った。督促状が届くと、驚いた父は財産管理を自分で行うようになったが、母は手を緩めなかった。知らぬ間に叔母や祖母にも布教し、献金を求めていった。祖母は夫を亡くして間もなかったため、母の言葉が響いたのかもしれない。「お父さんがいい霊界に行くために、お母さん、一緒に献金しましょう。」

やがて母方の祖母の財産はほとんど持っていかれ、母と叔母の献金を合わせると、その後、約三十年の間に八千万円以上が失われた。

母は教祖である文鮮明（ぶんせんめい）ひとすじだった。エマさんがどんなに「行かないで」と泣いても、父がやめてくれと頼んでも、聞かなかった。家族にとっては、自分たちの存在が母の「救い」になっていないことを思い知らされる日々だった。

当時中学生の少女だったエマさんにとって、親の財産とは別に切実なことがあった。「自由恋愛が禁止で、性的な要素をすごく嫌います」夕方、仲の良い男友達と下校していると、それを見た母がエマさんの髪を引っ張って部屋に連れていき、エマさんを殴った。「男の人を惑わすな」と長い髪を切るように言われ、はさみが持ち出された。「淫乱の霊が百個も二百個も付いている」「あなたはサタン側の人間だ」などと糾弾された。エマさんは傷ついた。

日記や写真を見られ、少しでも恋愛や性的なものが感じられると、教会が販売している高額な「聖塩（せいえん）」が撒かれた。それが結晶化し、家に帰ってくると自分の部屋が真っ白になっていたこともあった。サタンには塩を撒いて清めよ、ということらしかった。

その頃、テレビで合同結婚式の様子が盛んに放映された。文鮮明が指名した相手と結婚して家庭を持つことが幸せであり、天国に行く道だと母は言った。結婚式の当日は、木の棒のようなものを持ち、その結婚相手と互いの尻を叩きあわねばならない。

エマさんは子供心に、奇妙で気持ち悪いと思った。儀式や決まり事の一つ一つ、母がそれを強いてくること、そしてその背後にある異国の宗教団体と、その世界観を。

日常をむしばむ母との確執

ただ、物事をより複雑にさせたのは、そうした母の「狂気」が日常に混じっていたことだったかもしれない。穏やかでやさしい母親が顔をのぞかせ、楽しい家族のひと時もあった。そのことが逆に少女に混乱をもたらした。

「宗教二世は、幼いころから不安定さを押し付けられるので、人生自体のベースが不安定さに基づいてしまいます。」そこにこそ宗教虐待の「罪深さ」があるとエマさんは言う。

小さな少女にとって、母の背後にある宗教は「巨悪な存在」に見えていた。立ち向い方も逃げ方もわからず、合同結婚式とは別の未来をどうやって組み立てていけばいいのかも見えなかった。無力だった。

「とにかく助けてほしかったです」というエマさんはしかし、このような状況を友達や学校の先生に話すことができなかった。「受け入れてもらえないんじゃないかとかいう気持ちですね。今もそれはあります。それを言うことで縁を切られるんじゃないかとか。」

高校生になると、母はアルバイトを始めたエマさんにも、献金を迫った。「十万くらい出しなさい」銀行の前で車を止め、そう促された。嫌だと言うと取っ組み合いになり、その拍子にエマさんのコートのボタンがはじけ飛んだ。エマさんは助手席を出て、逃げ帰った。

エマさんの状況が外部に知れ渡るのは、十八歳の時だった。母親が作るご飯が気持ち悪くて食べられない日が続き、体重が一週間で3キロ減った。保健室の先生が異変に気付き、事の顛末を説明した。児童相談所につながり、児童神経科の先生に初めて話すことができた。

ただ、その後も母との確執は続いた。曾祖母が亡くなった時のことだった。「白い服で明日、ここにきて」と、知らない場所に呼ばれた。そこは母が通っていた最寄りの教会で、一室に教会長がおり、棺が真ん中に置かれていた。家族が棺の中に花を入れていくシンプルな葬儀。追悼の気持ち自体に隔たりはなかったのかもしれない。しかしエマさんは統一教会式の葬儀になっていることに腹を立てた。曾祖母は教会の信者ではなかった。死者への冒涜ではないか。「なんでこんな葬儀にしたの」喧嘩になり、一人で帰る道すがら、近くの寺の境内で泣いた。

（次号に続く）

今後、社会に望む変化として、被害認定の範囲拡大、宗教虐待で社会生活が困難になった人への支援、相談窓口の充実などを挙げたエマさん。

取材執筆｜矢田海里（やだかいり）　ライター。著書に『潜匠　遺体引き上げダイバーの見た光景』（柏書房）。

現代に生きるブッダの「ことば」

正木晃

写真 金子悟

正木晃（まさき・あきら）
宗教学者。一九五三年、神奈川県生まれ。国際日本文化研究センター客員助教授を経て、慶應義塾大学、立正大学講師。『「千と千尋」のスピリチュアルな世界』など多数の著書がある。

現代に生きる私たちにとって、心に深く響き、人生の指針になるブッダの「ことば」を、最も早い時期に成立したと推測されている「原始仏典」から選んでみよう。もちろん同じ「原始仏典」といっても、成立した時期には違いがある。現存する経典のなかでは、『スッタニパータ』や『ダンマパダ（法句経）』が最も早く、『ウダーナヴァルガ』や『パーサラーシ・スッタ（聖求経）』がその次くらいに成立したらしい。ブッダの生涯を語る仏伝では、『律蔵』「マハーヴァッガ（大品）」が最も早く、『大パリニッバーナ経（大般涅槃経）』はやや遅れると考えられている。

以下に引用したブッダの「ことば」は、専門研究者の間で、ブッダ自身が発した「ことば」である可能性が高いと考えられているものだ。なお訳者は中村氏である。

ブッダは殺生や暴力を徹底的に否定した。仏

教・キリスト教・イスラム教の三大宗教のうち、殺生や暴力の否定に関しては、仏教が圧倒的に厳しい態度をとってきたのである。

「『かれらもわたくしと同様であり、わたくしもかれらと同様である』と思って、わが身に引きくらべて、（生きものを）殺してはならぬ。また他人をして殺させてはならぬ。」

（『スッタニパータ』）

と説いている。また、

「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。……すべての（生きもの）にとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」

（『ダンマパダ（法句経）』）

とも説いている。

ブッダが殺生や暴力を否定するときにもちいたのが、ここに引用したとおり、相手もわたしと同様であるとか、わが身に引きくらべてという論法だった。早い話が、相手の立場になって考えてみなさい、とブッダは説いたのである。

さらに、

「実にこの世においては、およそ怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。……これは永遠の真理である。」

（『ウダーナヴァルガ』）

と、「怨み」の連鎖こそ、殺生や暴力を生み出すとも説いている。これはまことに至言である。今回のロシアによるウクライナ侵略でも、戦いが長引けば長引くほど、新たな「怨み」が次々に生まれ、ますます連鎖していくに違いない。そして「怨み」の連鎖が殺生や暴力の連鎖につながっていくに違いない。

現在の不孝の原因を、現在のみならず、過去世に求めたり、現在の不孝が来世まで影響をあたえると主張する宗教団体がある。旧統一教会はその一つである。ブッダに言わせれば、それは虚偽である。なぜなら、

「死ぬよりも前に、妄執を離れ、過去にこだわることなく、現在においてもくよくよと思いめぐらすことがないならば、かれは（未来に関しても）特に思いわずらうことがない」

（『スッタニパータ』）

と説いているからだ。

いかにも権威ありげな大部の教本を振りかざして、自分たちの主張を強弁する者に対しては、

「偏見に固執して論争し、『これのみが真理である』と言う人々がいるならば、汝はかれらに言え、――『論争が起こっても、あなたと対論する者はここにいない』と。」

（『スッタニパータ』）

というブッダの言葉で応えたら良い。この種の教本はおおむね 大部なだけで、内容は空虚かつ牽強付会（けんきょうふかい）の極みだ。だから、大仰な外見に騙されてはならない。

ブッダは、

「人々は実に（各自の）業に縛せられる」

あるいは、

「人がもしも善または悪の行ないをなすならば、かれは自分のした一つ一つの業の相続者となる」

（『ウダーナヴァルガ』）

とも説いていて、ある人の行為から生まれた業が、他の人に影響したり連鎖することはないと断言している。要するに「自業自得」なのである。

ちなみに「自業自得」というと、日本人の仏教観はなぜか悲観的な傾向が強いせいか、悪い行為が悪い結果を生むと考えられがちだ。しかし本来はどちらかといえば、良い行為が良い結果を生むという意味が強かった。

そもそもブッダの仏教に悲観的な要素がないとまではいわないが、少なくとも日本人が考えてきたより、はるかに楽観的なところがある。そうでなければ、四五年の長きにわたって布教活動し、大勢の弟子を育てたりしなかったはずだ。それを思うと、一部の宗教団体は、日本人の悲観的な傾向につけこんで甘い汁を吸ってきたともいえる。とすれば、仏教が本来もっていた楽観的な要素に、人々の目を向けさせる必要が出てくる。これは現代の仏教界にとって、すこぶる重要な課題かもしれない。

写真｜金子 悟（かねこ さとる）
1974年、横浜生まれ。早稲田大学芸術学校空間映像科卒。High Five Photos合同会社代表。

164号　目次

「そこにいる」ことの意義　島薗進　2

特集　ダイバーシティはしなやかな強さ　洞松寺に人が集まる理由　柳澤円　4

毎日書道　松山妍流　12

募集俳句選　尾崎竹詩　13

安らかな未来に向かう「八正道」的くらしかた③　藤井隆英　14

インタビュー　宗教虐待―被害者の声を聞く―　矢田海里　16

現代に生きるブッダの「ことば」　正木晃　20

観音の呪 大悲心陀羅尼

渡辺章悟著

大悲心陀羅尼は禅門などでしばしば読誦されるが、陀羅尼（ダラニ）の内容や意味について解説したものはそれほど多くない。それは、漢訳には「五種不翻」（インドの原典を翻訳しない五種の規範）という翻訳規則があり、陀羅尼は「秘密の故に」という第一の理由によって、サンスクリット原文が漢字に音訳されたまま、翻訳されずに伝えられたためである。そのためダラニとは、「意味がない呪文」と理解されがちであるが、決してそうではない。もともときちんとした意味を持ったサンスクリット文なのである。

発行所 仏教企画
定価: 本体500円+税

お申込　下記宛てに ハガキ・Eメール・FAX・電話にて

仏教企画
〒252-0116　神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
電話：042-703-8641　FAX：042-782-5117
Eメール：fujiki@water.ocn.ne.jp

表紙画「生命の季節」／平川恒太
お釈迦さまの誕生日を祝う花祭りなどの春の生命感あふれる様を、お釈迦さまと春の七草の一つでもある大根（すずしろ）の花とともに描きました。
絵画の起源は、愛する人が旅立つ際にその影を壁に写し描き残したものだとされています。
その逸話からインスピレーションを受け、お釈迦さまの切り絵を作りその影をスプレー塗料によって描き出しました。

季刊「曹洞禅グラフ」二〇二三年春号（通巻一六四号）令和五年三月一日発行　―　発行人＝藤木隆宣　―　編集＝加藤順子
発行所＝㈲仏教企画　〒二五二-〇一一六　相模原市緑区城山四-二-五　電話〇四二-七〇三-八六四一
http://www.bukkyo-kikaku.com　―　デザイン＝Maipu Design　―　印刷所＝恒信印刷　―　定価二〇〇円